様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３７１

研究課題名（和文）近代技術をめぐる思想史的コンテクストの諸相

研究課題名（英文）Technology and perception in the German philosophical tradition

研究代表者
山口　裕之（YAMAGUCHI, Hiroyuki）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：４０２４４６２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ヴァルター・ベンヤミンにおける近代技術と身体性をめぐる問題領域と、それとは一見対極的な位置を占めるかのように見える神学的思考のコンテクストとを結びつけることによって、ベンヤミンの思考の特質を明らかにすることを目指すものである。ベンヤミンが「複製技術論」のなかで論じている近代技術とそれに伴う知覚の変容（とりわけ、現代のハイパーテクスト的なメディア理論へと敷衍されるような断片の再構成とモザイク的な知覚の様式）は、他方ではベンヤミンにとって「救済」を目指す神学的思考モデルと重ね合わされている。この神学的思考においては、非歴史的な「時間」概念がきわめて重要な要素となっている。

研究成果の概要（英文）：This research aims to connect the context of the relation between technology and human perception in Walter Benjamin to the context of his theological thought, and thus to shed some light on the characteristics of his thought in general. It can be assumed that technology and transformation of perception, as are thematized in Benjamin's essay "The Work of Art in the Age of its Technological Reproducibility" - and especially reconstruction of fragments and recognition of these mosaic images which are also discussed in the contemporary hypertext theories -, are overlapped with the stage of redemption in his theological model which should be understood from the perspective of an ahistorical concept of time.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学　ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ベンヤミン　メディア理論　知覚　歴史哲学　神学　近代技術

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究担当者自身の研究上のコンテクストとしては、科学研究費によるそれまでの研究（「「視覚」と「触覚」をめぐる言説とメディアのインターフェースに関する研究」基盤研究 C, 2007-2009 および「ベンヤミンのアレゴリー的思考とメディア理論の接合をめぐる研究」基盤研究(C)(2) 2003-2005）をさらに発展させたものという性格をもっている。

本研究において近代技術は、19 世紀的な精神性のパラダイムを積極的に解体する契機として位置づけられる。ここで中心的に取り上げるテクストの一つである、ヴァルター・ベンヤミンの『技術的複製可能性の時代の芸術作品』もそのようなコンテクストにおいて受容されてきたが、これまでの研究では、複製技術論の中の顕在的な主題群（芸術の機能転換、メディアと知覚の転換、マルクス主義的コンテクスト）に対する視点が支配的であり、ほぼ同時期の「歴史の概念について」に顕著にみられるような、神学的思考に支えられた歴史の概念と、そこから一見もっとも遠い位置にある技術メディアとが、むすびつけられることはなかった。研究担当者はこれまで、ベンヤミンのアレゴリー的思考が完全に神学的歴史概念に基づくものであるとともに、画像的断片であるアレゴリーをモザイク的に配置するという思考のあり方が、現代のハイパーテクストの理念そのものを体現しているという立場からベンヤミンの思想を研究してきたが、本研究はその立場を引き継ぎつつ、とりわけ以下の問題に焦点を当てようとした。

1．ユングの「集合的無意識」の相関概念として想定された「集団的身体」の概念
2．マルクス主義的な「集団」概念における技術と人間をめぐる問題
3．神学的歴史概念（西欧ユダヤ主義における「救済」の思考）

この 3 つの問題領域のそれぞれに対して、これまで重要な研究がなされてきている。例えば、ベンヤミンが「シュルレアリスム」論にみられる「集団的身体」をめぐる思考については、N. Bolz も触れているが、ただしそこでは「集団的身体」の問題は、ベンヤミンの思想の根底にあるはずの進学とむすびつけられることはない。また、西欧ユダヤ主義における「救済」をめぐる問題連関は、いうまでもなくベンヤミン研究の中で非常に大きなトピックを形成しているが、この問題が技術自体の連関で扱われることはこれまでなかった。本研究は、こういった二つの問題領域を架橋することによって、ベンヤミンの思想、さらには 20 世紀初頭のドイツ思想にとって決定的に重要な両極的契機を明らかにすることを目指すものである。

２．研究の目的

(1) 本研究は、近代技術をめぐる思想史的コンテクスト（とりわけ、ベンヤミン、バラージュ、クラカウアー等の初期のメディア論や、アヴァンギャルド芸術における近代技術の位置づけ）とドイツ・ユダヤ人思想家（ベンヤミン、ローゼンツヴァイク、エルンスト・ブロッホ等）に顕著にみられる神学的思想のコンテクストという、両極的な位置を占める問題領域を結びつけて考察することによって、それぞれの領域における問題の輪郭をさらに明確なものとすることを目指すものである。

この基本的視点に立ちつつ、本研究ではとりわけ次の二つの対象・課題に取り組んでいった。

① ベンヤミンの「集団的身体」の概念分析：ユングの「集合的無意識」およびマルクス主義的コンテクストでの「集団」という異なる問題圏の相互浸透として、ベンヤミンにおける「集団(Kollektiv)」概念を考察し、複製技術論で展開されている「技術」・「集団」・「触覚的」身体性のコンテクストとむすびつけてゆく。それにより、メディアにおける技術性と身体性（触覚性）の問題を、「集団」をめぐる問題件において明らかにする。

② 西欧ユダヤ主義における「救済」の思考の考察：
ベンヤミン、ショーレム、エルンスト・ブロッホ、ローゼンツヴァイクといった思想家たちにおける「救済」概念の相互関係を明らかにする。それによって、ベンヤミンの神学的な歴史観念とメディアの問題との関係を、さらに幅広いコンテクストからとらえる。

この二つの課題は相互に大局的な関係にあるように見えるが、最終的にはこの二つの論点を統合的にとらえてゆくことが、この研究全体の目標である。①の課題においては、一方ではユングにおける「集合的無意識」の概念が、ベンヤミンの思考の中でどのような位置を占めていたかを明らかにし、他方ではマルクス主義のコンテクストにおける「集団」に関する言説をおもにベンヤミンのテクストに即して分析した。②の課題では、とりわけベンヤミンとブロッホに特徴的な「想起(Eingedenken)」という概念を明らかにすることが、ベンヤミンの歴史概念とメディアの問題を考えるうえでも決定的に重要である。

(2) 技術メディアをめぐる論点と神学的な歴史概念を交錯させることを主眼とするこの研究の枠組み全体が、ベンヤミン研究において独自の位置を占めるものと言える。後期ベンヤミンの理解において、引き裂かれた両

極のようにとらえられていた唯物論的な技術観と神学的な「救済」の観念を、一つの枠組みのもとにとらえることによって、この研究はベンヤミンの思想を一貫した思考のうちにとらえようとしている。本研究には、ベンヤミン研究としては、何よりもその点に独自性と意義があると言えるだろう。

ただし、この研究は単に狭い意味でのベンヤミン研究にとどまるものではない。これは「近代技術」をめぐる 20 世紀前半ドイツの思想史研究であるとともに、何よりも現代のメディア理論のための研究でもある。本研究は、一般的にメディアがますます「個」へと向かう現象が指摘されるメディア研究のコンテクストに対して、メディア展開の極点においてむしろ「集団」が出現する弁証法を提示することになるだろう。また、人間が中心に据えられることにより構築されたメディア理論に対して、いわば神の視点からとらえられるような、人間の主体的関与からもはや離れたメディア展開の極点を提示することになるだろう。

３．研究の方法

本研究には、①ベンヤミンが掲げている「集団的身体」の概念を拠点として、「集団」における技術性と身体性の問題を考察するメディア理論的研究と、②神学的歴史概念と技術メディアの理論との接合を考察していくために行われる、西欧ユダヤ主義における「救済」概念の分析という二つの具体的課題がある。これらに対応する形で、本研究では次の三つの研究段階を設定した。

(1) ベンヤミンが、ユングの「集合的無意識」、およびマルクス主義的コンテクストにおける「集団」の問題という、それ自体としては互いに遠く離れた思想の構成要素をどのように受容して彼自身の思考の中で統合し、「集団的身体」をめぐる技術性と身体性の問題へと展開させているかを、テクスト分析を通じて考察する。

(2) 神学的歴史概念と技術メディアの理論との接合を考察していくために、西欧ユダヤ主義における「救済」の概念を複数の思想家のテクストにおいて分析する。（とりわけ、ベンヤミン、ローゼンツヴァイク、アドルノ、エルンスト・ブロッホ）

(3) これら二つの両極的な課題の成果を一つの統合的な研究へとまとめる。

これらの研究段階において、分析・考察の対象としたのは、まずベンヤミン、ローゼンツヴァイク（とりわけ『救済の星』）、アドルノ、エルンスト・ブロッホといったドイツ語圏の思想家のテクストであるが、それとともに、アガンベン、タウベス、大貫隆等の神学的考察も、本研究のなかで重要な研究対象となった。

さらに、研究の進展に伴って、当初の計画ではとくに想定されていなかった翻訳をめぐる思考についても、ベンヤミンの神学的連関のうちに組み入れて考察されることになった。そこでは、翻訳をめぐるベンヤミンの思考をテクスト分析によって明確に浮かび上がらせることを目指すとともに、トランスレーション・スタディーズにおける論議の歴史的コンテクスト、さらにはドイツ語圏における翻訳理論のもつ特殊な歴史的コンテクストからベンヤミンのテクストを分析するという立場をとることになった。

４．研究成果

本研究における成果は、研究遂行の過程において、大きく分けて３つの方向で展開された。

(1) ベンヤミンのマルクス主義的思考／アヴァンギャルド芸術論における技術性と身体性の問題

この問題領域において明らかにしたのは、「シュルレアリスム」論で言及されている「人間学的唯物論」という特殊な概念において、ベンヤミンがシュルレアリスムという運動体について語ることを通じて、近代技術と結びついた人間の身体性と唯物論の交錯の場を提示しようとしていたこと、そしてそのことはベンヤミンにとって、同じ時期に進行していたパサージュ論の思想的核をなすものとなっていたということである。ここには、マルクス主義的な政治性と、「アレゴリー的思考」のうちに見られる神学的思考がいわば潜在的なかたちで結合していることを見て取ることができる。

（論文２「ベンヤミンのシュルレアリスム――物たちの「シュルレアリスム的な顔つき」、図書１「〈集団もまた身体的である〉――ベンヤミンの〈人間学的唯物論〉」、および学会発表１「The Russian Avant-garde from and its impact on the Perspective of Walter Benjamin」）

さらに論文１（「カール・クラウスと新ウィーン楽派」）も、技術性と身体性の問題の周辺領域にかかわるものとして、こういった思考の副産物として位置づけることができる。この論文は、直接的には新ウィーン学派の作曲者たちへのウィーンの批評家カール・クラウスの影響関係を論じたものだが、とりわけ第一次世界大戦頃までのクラウスに顕著にみられる保守的な技術観・芸術観、そして独特な言語観と結びついた身体性の問題は、本研究にとっても重要な意味を持つものである。

(2) ベンヤミンの神学的思考の問題

「救済」を目指す神学的思考モデルは、ベンヤミンをはじめとして、同時代の西欧ユダヤ主義の思想家においてさまざまなバリエーションをとりながら存在している。ベンヤミンにおいてきわめて特徴的なことは、この神学的思考が、一見してその対極物であるかのようにも見える近代技術の問題、またそれによって規定される身体性の問題と緊密に結びついているということである。これらの問題連関のうち、とりわけ「救済」をめぐる神学的思考が同時代のユダヤ人思想家たちとのどのような思想的関係において形成されていたのかを明らかにすることがこの研究の一つの大きな目的だった。これに関しては、研究期間を通じて一貫して中心的案研究主題となってきたがまだ何らかの発表手段によって明確なかたちをとっていない。ここでの中心的な関心は、「救済」という思考における「時間」概念の問題である。アガンベン『残りの時』、大貫隆の『イエスの時』はこの連関において非常に重要な導きの糸となっている。カール・バルト『ローマ書講解』がベンヤミンの神学的歴史概念、アレゴリー的思考における時間概念にとって決定的な影響を与え、エルンスト・ブロッホともつながるベンヤミンの「想起 Eingedenken」の概念をそのコンテクストから明らかにするというのがここでの研究上の意図であった。

(3) 翻訳と神学的思考

ベンヤミンにとって「翻訳」をめぐる問題は、タンに実践的な言語の移し替えの問題ではなく、完全に神学的領域のうちにある。本研究にとって、結果的に発展的な研究課題となったこの研究領域において、研究担当者はベンヤミンの思考の内部の論理だけでなく、それをトランスレーション・スタディーズの言説の連関からとらえることによって、19 世紀ドイツに典型的に見られた翻訳理論（シュライアーマッハー、フンボルト等）のもつ歴史的性格をベンヤミンのうちにも見て取ることになった。（発表 2 Translation/ Transformation. Für eine Theorie der „verfremdenden“ Übersetzung.」）なお、発表そのものについては、この科学研究費の期間外となるが、2014 年 5 月 5-6 日にボローニャ大学で行われた国際セミナー「Tradizione, Traduzione, Transformazione」における発表「”The Translator’s Task” in the Context of Translation Studies」もまた、この研究の方向性から展開してきたものであり、研究自体はこの期間内に行われたものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2　件）

① 山口裕之「ベンヤミンのシュルレアリスム――物たちの「シュルレアリスム的な顔つき」――」　（『思想』No. 1062（2012 年第 10 号）岩波書店（査読なし）

②山口裕之「カール・クラウスと新ウィーン楽派」（『思想』No. 1058（2012 年第６号）岩波書店（査読なし）

〔学会発表〕（計 2 件）

① Hiroyuki YAMAGUCHI, Translation/ Transformation. Für eine Theorie der „verfremdenden“ Übersetzung. („Übersetzung als transkulturelle Tätigkeit“, Forschungsprojekt der Universitäten/Institutionen in Tokio-Zürich-Bologna-Moskau: „Transformation der Repräsentationen als transkulturelle Erscheinung im 20. und 21. Jahrhundert“), 24. November 2013, Asien-Orient-Institut der Universität Zürich

② Hiroyuki YAMAGUCHI, The Russian Avant-garde from and its impact on the Perspective of Walter Benjamin (「20 世紀以降の文化横断的現象としての表象変容に関する日欧共同研究」- 「文化の変容、パースペクティヴの変容」2013 年 9 月 13 日(金)、モスクワ・イタリア文化会館)

〔図書〕（計 1　件）

① 山口裕之「〈集団もまた身体的である〉――ベンヤミンの〈人間学的唯物論〉」、『〈過去の未来〉と〈未来の過去〉　保坂一夫先生古稀記念論文集』同学社 2013 年 3 月, 422-433 頁。

〔その他〕

ホームページ等

http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/yamaguci/

６．研究組織
(1)研究代表者
山口 裕之（YAMAGUCHI, Hiroyuki）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：40244628